

シンポジウム

地域教育とウェルビーイング

2021年12月4日(土)16:40~17:50

コーディネーター：関 福生（新居浜市生涯学習センター所長・生涯学習大学長）

登壇者：菅野 祐太氏（岩手県大槌町教育委員会教育専門官）

竹原 和泉氏（NPO 法人まちと学校のみらい代表理事）

大畑 伸幸氏（島根県益田市教育委員会ひとづくり推進監）

仙波 英徳氏（NPO 法人えひめ子どもチャレンジ支援機構 事務長）



関：オンラインで開催しているため、入退出で多少のアクシデントがあった。そのため、予定していた時間に始めることができなくなったのでご了承いただきたい。

60分で回していくので、対話型の時間がとれない。チャット等で対応していく。

子どもとの関係の中でのウェルビーイングということで、みなさんにお話を伺う。

一人目は、菅野祐太さん。復興の中で、よそ者として岩手県大槌町に入り活動を進めた。理解できないことや、体験、思い等を聞かせてほしい。

菅野：東日本大震災、津波から11年経った。11年前、東京のリクルートで働いていた。このままここに居続けていいのかと自問自答。そして、退職。認定NPO法人カタリバに再就職した。カタリバの活動は、どのような環境に生まれ育つてをつくりだす力を育む。困難な状況の子どもたちを学びの視点で考えることを目的としている。全国に拠点があるが、

る。
RiBA



私は岩手県大槌町にいる。今回は、2つの投げかけをしたい。被災した大槌小学校は、学習環境を失った。避難所では、子どもが役に立つことはなく、うるさくするなどのけ者扱い。そのような中で、自分たちもなんとか、地域の課題を自分たちでどうにかしたい、役に立ちたいとマイプロジェクトを立ち上げた。

事例を紹介する。高校生の吉田君は、地震から津波まで40分の時間があったのに、「どうせ来ないだろう」と思っていた。防災意識が欠如していた。石碑はあったが、風景となって誰もみていない。それで、地域の人と話し合っ、木の碑を立てることにした。4年に1回建て替えることで、防災意識を図る。その他、たくさんのプロジェクトを考えた。地域の人たちは、希望のように高校生をみるまなざしが変わった。

古川君は、釜石東中のときに被災。親を亡くした。情報が上手く伝わっていたら、助かる命もあったのではと、防災無線に問題があったのではと無線をかえるプロジェクトを考えた。地域の人に聞いてもらいながら、課題を突き詰めていく。大槌町役場も動く。地域の人々の力、大人の伴奏者がいる。高校生の探求的な学びを社会教育が実現化していく。

現在、私は、地域から応援する立場であったが、コーディネーターとして県立高等学校に入っている。高校では、総合的な学習活動というより、自分が主体的に設定する、考える探求活動が始まっている。これは、学校だけではできない。

もう1つは、大人が、子どもたちの居場所をつくりたい、中高生に何かしてあげたいと思う大人が「おしゃっち食堂」を始めた。しかし、大人の一方的な思いで、高校生が来てくれない。そこで、高校生にどうにかしてほしいと投げかけた。高校生は役割を与えられ、内容を認識し参画していった。友だちを集めて来てくれるようになった。より積極的に主導的になった。子ども主導の活動に大人が巻き込まれる。食堂をしているおばちゃんたちもうれしくなる。地域の方も高校生に自分たちの知識を教えることとなる。高校生の探求的な学びを社会教育が受け止めることになった。

なにかしようとしたときに、3つの動機がある。競争動機（競争に勝ちたい）理解動機（何かを理解したい）感染動機（あの人がみたいになりたい）コロナ感染につながって、地域につながる憧れの感染になればと思う。

関：われわれが言うつながり。マイプロジェクトの取組、学校教育の中から社会教育にシフトしているか。

菅野：融合・連携してやっている。最初は子どもが集まってこなかった。学校は、すべての子どもが集まっている。実際活動するのは地域、それは何だったか学習するのは学校で。

大畑：小中で積み上げていったことが、高校での探求で上手くいく。そのきっかけの先のところでは社会教育がある。学校外の活動をしっかりしないといけない。学校での探求はきっかけだと思っているので、社会教育につながっていくことを考えていく。

竹原：探求の学びを高校で。その視点で、先生が動いた。社会教育ではすでに、ノウハウや

実践がある。学校教育と社会教育がもっとつながっていく。先生方に社会教育の視点をもってほしい。

関：大畑さんに、益田市のこと、過疎化がすすんでいるので、ひとづくりをまちづくりのはしらにしていることなどお話をお伺いしたい。



大畑：益田市は200人の集落から12000人が住んでいる

ところ、大学所在地ではないので、9割が高校を卒業して出て行く。大学を卒業しても、3割しか戻ってこない。何もなくていいところなので、何でも作れる。その作ることの喜びを知ってほしいと思っている。大人も子どもも、対等な立場で、信頼関係を得てつながっている。菅野さんの言うところの、あこがれの感染、あこがれの連鎖である。将来の種まきをして、市外に出ても、旗を持って帰ってくると信じている。子どもたちの育ちには、多様なロールモデルがいる。学校でないと共に活動することによって、自分は将来、このようになりたいとしっかり思える子どもをつくりたい。学校教育は無駄が出来ないので、足りないところは社会教育でやりたい。

担い手育成コンソーシアム、地域全体が育ちの場。大人と対等に語っていい関係、そこで何かをする。出会いの場、信頼関係の場を社会教育のノウハウでネットワーキングしていく。小学生、中学生、高校生とともに語り合う場、カタリ場から広がった。きっかけづくりをするには、対話が必要。地域全体で子どもの育ちを助ける。中学生の何かしたいは公民館で、民間もはいる。学校は個を伸ばす。育ちのネットワーキングが始まる。

現在、「カタリ場」を多様な形で行っている。社会教育でのカタリ場を出会いの場へ変えたい。活動も広がった。学校から子どもをひっぱりだしたところでネットワーキングをする。このようなことをしたいと言う子どもとこのようなことをしてもらいたい大人がつながる。学校は子どもが集まる場所なので外せない。教育を民と一緒にやってどのようにできるか。公民館で地域の活動をどんどん利用する。現在、小学生×高校生、小学生×中学生、子ども×地域住民等でカタリ場を開催、1対1で「どんな大人になりたいか」生き方を話し合う、中学生の職場体験においても、事業所に働く方の思いや誇りなどしっかり、中学生に伝えてもらったりしている。

よりよい市民としてどう生きるか、地域全体が育ちの場。地域の担い手がいなくていいのであれば、そこで育てるネットワークをつくる。

コロナ感染の中で、地域のために何かしたいと、中学生が言う。地域の公民館が、若者たちの部会に招待。竹とんぼを作って高齢者施設に配る。公園もきれいにしたい、600人集まる竹灯籠イベントどうすればいいか、1から考え、計画する。あこがれの連鎖が広がる。学校外の活動で生まれるあこがれの連鎖。自分たちを育ててくれた

この地域をもっと盛り上げていきたいと思うようになる。開花する中学生。学校では経験できない。学校外の活動で、実現し、かたちになっていく。やりたい気持ちがつなぐ。引き出されるアイデア、笑顔と共に次の第一歩。地域の活動に興味を持ってほしい。飛躍する子ども。だれかのわがままだと思っていたことが実現するまち益田。中学校で体験したことを高校で探求、旗をもって帰ってくる子ども、次の子どもたちのロールモデルにと考えている。地域を支えられる学校でありたい。高校生は公民館に行くことが難しいので、丁寧につなぎ続ける。

関：人づくり、行政の中核、このような動きになったきっかけ

大畑：今頑張っている人しか応援していなかったが、必要なのは、後継者。難しいから、社会教育現場の方をお願いした。

菅野：あこがれの連鎖は、カタリバより考えていただいた。まずは、誘い出すことが近い。どう誘うか、学校は、どうそそのかすか、社会教育へおいきよと。

竹原：カタリ場のワード。詳細をおしえていただいた。小中高と狭まってくる地域との連携。地方だけでなく、都市部でも考えることが多い。このような考えですと、憧れの連鎖、始まったばかりだけれど、あたらしい。

関：竹原さんとは、文科省の会であったが、コミュニティ・スクールのことについても教えていただいた。

竹原：関さんとの出会い、この人ともっと話したい。と半歩前に出た。大畑さんとも菅野さんとも、会うべきところで会った。コミュニティ・スクール第1号、あおばコミュニティテラスを中心に話をする。自己紹介から。都会で育ったが、大学の時に、岩手・福島



のとある分校で寝泊まりをした。「何かをやってさしあげること」でいったけれど、大間違いだった。学校の外で学びの場があること、そしてその中に喜びもあることを知った。社会教育主事の資格をとって、これで生きていこうと思った。結婚をして、夫の赴任地であるフランスでは、日本人のための幼稚園をつくったり、勉強会をしたりした。アメリカでは、市民がつくる学校、コミュニティ・スクールの原型に参加し活動した。帰国後、横浜で、社会教育指導員公募のチラシをみつけて、応募した。最初は、市民活動・生涯学習活動する人のサポート、都市のサポートをする人の研修等をしていった。その後、コミュニティ・スクールをしてみないかという話があり、11年ほどコミュニティハウスの館長をしていた。

昨年度から、あおばコミュニティハウスを運営している。今までの思い、青少年活動等をチームで活動。学校でも家庭でもない「中高生世代のサードプレイス居場所」として、中高生中心で、赤ちゃんから年寄りまで、利用者相互で交流できる、フリースペースとして過ごせる自由な空間の提供をしている。縁側相談としてモヤモヤした気持ちを相談に来てもいい。専門家2人のいるカウンセリングルームも併設して

いる。

今回、分散会で発表した「あおば未来プロジェクト」は、中学1年生。遜色なく円卓を囲んで話す。中学生を高校生がサポートし、その中高校生のサポーターとして大学生がいる。大学生にとって、発案等是可以するが、中高生を支えるのは難しい。その後方支援として私たちが話を聞くようにしている。課題意識の共有、アドバイス、紹介等、発表の場をつくっている。プロジェクトはたくさんある。子どもの多様性と気づける感度を磨くこと、主体性とサポートを考えている。課題意識の共有はファシリテーターが受け持つようにしている。

みなとみらいと違って、最後まで開発されていない、ネットワークもできていないあおば地区で、まちづくりをどのようにつなぐか。情報収集と分析のために市役所へいたり、フィールドワークをしてデータを集めたりしている。今年の参加者は、中高生22名、大学生8名。プロセスを重ねるうちにチームになる。

コロナ禍の中でもできるボランティア、子どもを核にしてネットワークの構築。企業の方や福祉分野の方とも思っている以上につながる。

また、ある男子学生の提案で、いじめについて考えた。自分たちのことだけではない。ワークショップから始めた。深い話になる。学び続ける力。地域の中で、様々な人、想定が異なることにも出会う。大人が用意せず、先回りしないことで、子どもは、本物と出会い、心に火をつけることになる。子どもの多様性を感じる。気づける感度を磨くことが出来る。中高生の活動を支えてくれるのは大学生。大学生はそのことから新しい学びを知る。大人も大学生がいることで、いいつなぎとなっている。誰かが何かをするのではなく、自分たちの力です。それがいいチームになり、町の未来につながる。

関：今、種をまかないと実らない。ますます実っていくことを願う。

菅野：スーパーコーディネーターとしての竹原さん。大学生はつなぎの役割として重要だとよくわかった。誰が誰をさせ感染るかわからない。分からないけれど、計画された偶発性、学びをどうつなげるか、来年は竹原さんのところにも参加したい。

大畑：定年になったら、市民活動をしたい。福祉と教育は連携できないが。

関：最後は愛媛県の無人島体験事業について仙波さんから話してもらおう。

仙波：昭和63年少年冒険体験事業として始まった。平成20年、

文科省が予算をつけないということになった。それで、実行委員会を立ち上げ、官民共同事業とした。

目的は、9泊10日の無人島体験。学校の中に閉じこもっている子どもをどうするか、地域に子どもがいなくなつてから久しい。子どもがみえてこない。地域と学校、協働・融合をどうするかということであった。



無人島では、リーダーとして教員、サブリーダーとして大学生、小学校4年から中学校3年生までの子ども、養護教諭、看護師等が参加する。リーダーの先生は、基本的には教えない。子どもの気づきがあるまで、ゆっくり待つ。先生は、待っていれば、子どもが力を発揮することがわかる。子どもは、自己達成感をもつことができる。毎年、イノシシ対応等で、いろいろな大人がかかわってくれている。ビデオ撮影は、ドローンでおやじの会が撮影してくれた。教育委員会とNPO 温度差がある。

関：大畑さんの方からメッセージ

大畑：成長したがっているがなかなかできない。専門的な知識が必要である。丁寧につながっていくと学校が豊かになっていく。令和4年3月5日フォーラムをするのでよろしくをお願いしたい。

竹原：待つということ、大事だけれど難しい。先生が学ぶいい話。子どもの伴走で、大人が学ぶ。子どもが変わって帰ってくる、成長する。確信した。

関：仙波さんは民間の人だけれど、社会教育主事の資格を身につけた。確かに、そのような専門的知識が必要かもしれない。

今回、みなさんのことばを一つ一つ受け止めていただいて、活かして行ってほしい。拍手で終わりとしたい。

閉会挨拶 浅野 長武

伊方町に住んでいる。ウェルビーイングの色は何色か、私の思うところ、黄色かオレンジ、今伊方町は、みかんでオレンジ色に染まっている。幸せを感じる風景。高校とウェルビーイングのかかわりを紹介したい。

多くの高等学校が分校になっている。それも何年かで廃校になるかもしれない。地域から高等学校がなくなるのは大問題である。

三崎高等学校の話をした。やはり、生徒数が激減して、存続が危うくなった。高等学校の魅力もなくなってしまうと、地域との連携に取り組んだ。高校生は全国募集をした。たくさんの事業の中から、みかんアルバイトや文化祭の中で、地域の出し物をした。うちの地域にきてぜひしてほしいという人も現れた。

南予地方、世界農業遺産、ネットワーク、愛媛大学、行政、農家等連携して新しい風を吹かす。つながりがかたちになっていく。だれ一人とりのこされない地域をめざして。

来年は対面で出会うことを楽しみにしている。